

# クズマ遺跡第3次発掘調査報告書

平成14年度

倉吉市教育委員会

# クズマ遺跡第3次発掘調査報告書



遺跡略号 4DKK・3

平成14年度

倉吉市教育委員会

## 序

この報告書は、個人の農地造成に伴い倉吉市上神字クズマにおいて実施したクズマ遺跡第3次発掘調査の記録です。

この遺跡周辺には、国の重要文化財に指定された祭祀遺物が出土した谷畑遺跡をはじめ、多くの歴史的遺産が現在まで伝えられています。本市では、これらの歴史的遺産を後世に伝承するだけでなく、より良く活用することができるよう文化財保護行政を進めています。

今回の発掘調査は農地造成部分の限られた部分での調査でしたが、多数の土器と共に、祭祀に使用したとみられる動物形・手捏土器などが出土しました。これにより、蜘蛛ヶ家山南麓の上神地区周辺祭祀遺跡の多さがいっそう際立つことになりました。

本書が文化財の理解・普及に、あるいは教育・研究の一資料としてお役に立てば幸いに存じます。

最後に発掘調査にあたりご協力いただきました地元関係者ならびに関係機関各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成15年3月

倉吉市教育委員会

教育長 福 光 純 一

## 例 言

- 1 本報告書は、個人の農地造成に伴う事前調査として、平成14年度に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け、鳥取県倉吉市上神<sup>かすわ</sup>字クズマにおいて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 調査体制は次のような組織・編制である。

調査主体	倉吉市教育委員会	
事務局	倉吉市教育委員会文化課	
	福光 純一（教育長 14年6月から）	景山 敏（教育次長）
	真田 廣幸（文化課長）	佐々木英則（文化課課長補佐兼文化財係長）
	藤井 敬子（文化財係主任）	森下 哲哉（文化財係主任）
	根鈴智津子（文化財係主任）	加藤 誠司（文化財係主事）
	山崎 昌子（文化財係主事）	岡平 拓也（文化財係主事）
内務整理	松嶋あつ子・竹歳 暁子・遠藤 美佳・大川 京子・大西 利恵・関 美幸 田口小代子・戸田めぐみ・村垣みゆき・森木 恵子	
- 3 現地調査は加藤が担当した。本書の執筆は調査員が討議し、加藤が行った。
- 4 第1図（地形図）は、国土地理院発行の1：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆した。
- 5 挿図中の方位は国土座標第V座標系の北を指す。
- 6 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一した。
- 7 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

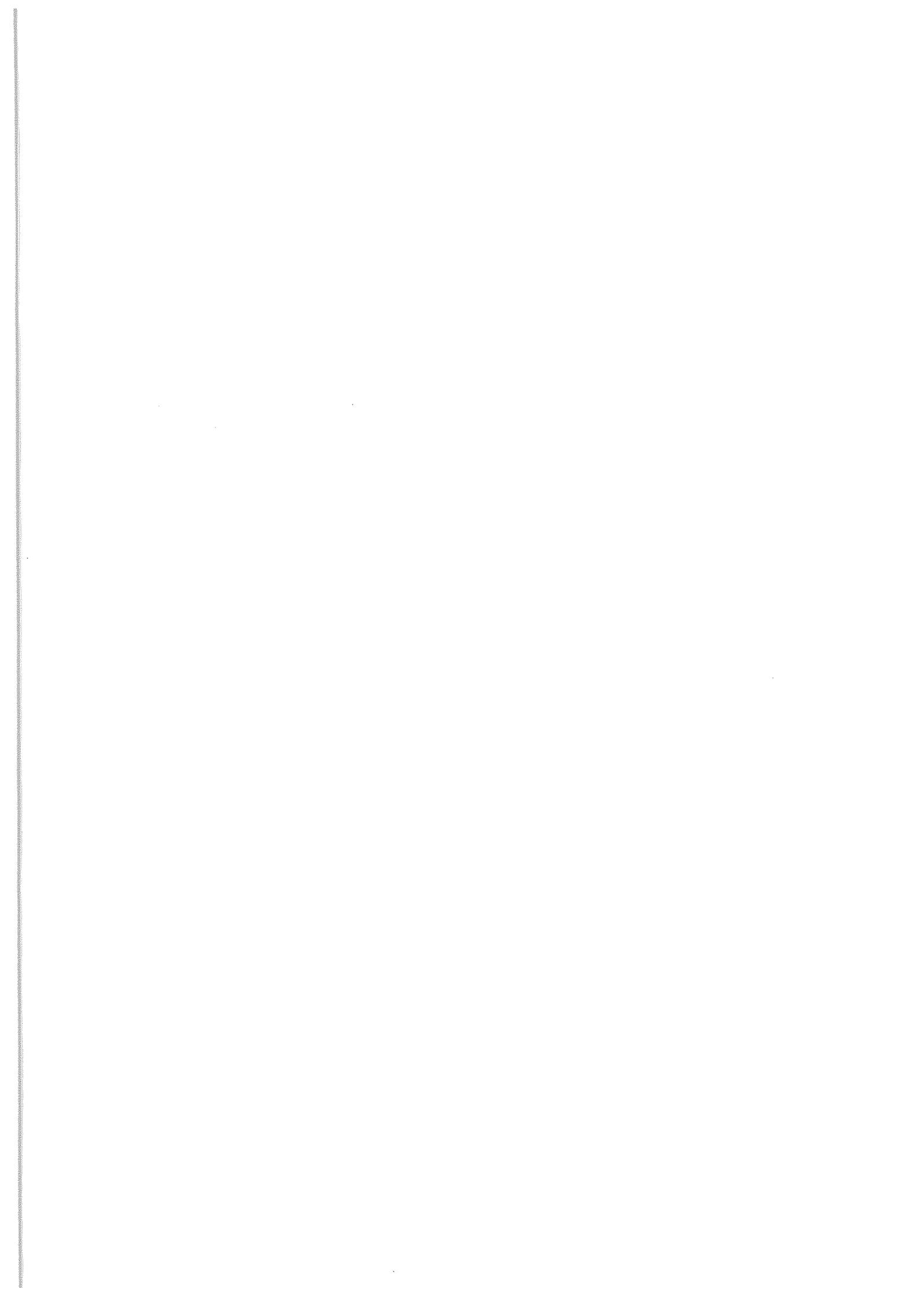
I 発掘調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	1
III 調査の概要	5
1 遺構	5
2 遺物	8
IV まとめ	10
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 周辺の地形と遺跡分布図	2
第2図 クズマ遺跡第3次発掘調査区位置図	3
第3図 クズマ遺跡第3次発掘調査区遺構全体図	4
第4図 サブトレンチ断面図	5
第5図 1号住居状遺構、1号段状遺構 遺構図	6
第6図 2号段状遺構、1号・2号土壙、1号集石 遺構図	7
第7図 出土遺物実測図	9
第8図 クズマ遺跡第2次・第3次発掘調査区遺構模式図	11

## 図版目次

図版1 遺跡	調査前全景・調査後全景
図版2 遺構	1号住居状遺構・1号段状遺構・2号段状遺構
図版3 遺構	1号土壙・2号土壙・1号集石
図版4 遺構	1号土器集中区・1号土器集中区南端・紡錘車状土製品出土状況
図版5 遺構	2号土器集中区・2号土器集中区北端・動物形2出土状況
図版6 遺物	祭祀遺物
図版7 遺物	祭祀遺物
図版8 遺物	祭祀遺物・土器
図版9 遺物	スタンプ文土器・竹管文土器



## I 発掘調査に至る経過

平成12年に倉吉市上神の山崎彰子氏より、倉吉市教育委員会文化課に倉吉市上神字クズマの斜面畑地約2,000㎡を平地にする造成を行いたいとの相談が寄せられた。当該地は、クズマ1次調査地と2次調査地にはさまれた浅い谷部分で周知の遺物散布地であったため翌13年8月に試掘・確認調査を実施した。<sup>註)</sup> その結果、地下式横穴1基と各トレンチから非常に多く遺物と共に土馬、手捏土器などの祭祀遺物が出土し、遺物集中区の点在を確認した。このため、山崎彰子氏と協議を行い500㎡について発掘調査を実施することになった。

発掘調査は倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け平成14年6月12日～平成14年9月19日まで行った。

註 森下哲哉 「上神クズマ地区(クズマ遺跡)」『倉吉市内遺跡発掘調査報告書12』倉吉市教育委員会 2003

## II 位置と歴史的環境

クズマ遺跡は、倉吉市街地から北西に約4km離れた倉吉市上神字クズマに位置する。調査地は倉吉市北側の北条町にある蜘蛛ヶ家山(標高171.1m)から南西へ樹枝状に派生した丘陵の末端部近く、北西から南東に延びる2つの尾根にはさまれた斜面と谷部分である。標高は29m～36mで水田との比高差は約15mである。

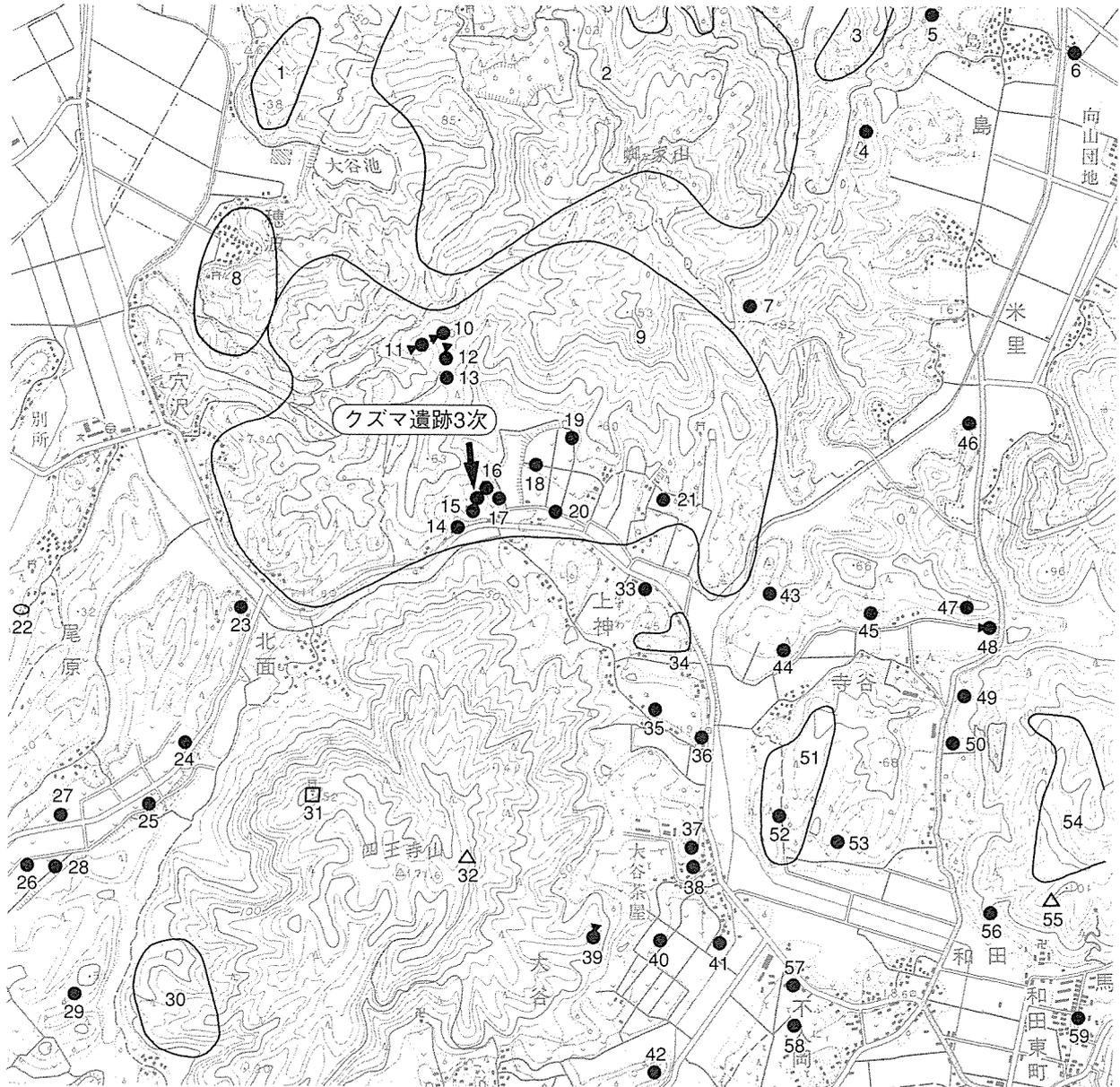
クズマ遺跡1次調査地(15)は3次調査地から南約100mの丘陵尾根上に位置する。調査は昭和60年に行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居30棟と古墳時代後期の円墳10基などを調査した。なかでも、古墳周溝の上面から7世紀後半の土器と共に土製の人形、馬形、有溝円板、手捏土器、竈、土製支脚が出土している。クズマ2次調査地(16)は今回の調査すぐ北側尾根に位置する。調査は平成11年に行われ、竪穴式住居2棟と円墳1基などが確認された。古墳周溝上面から土製の馬形、猪形、土玉、紡錘車、手捏土器、甕、土製支脚が出土した。

蜘蛛ヶ家山と四王寺山にはさまれたクズマ遺跡のある上神地区周辺は遺跡が密集する地域である。古くは上神51号墳(13)の盛り土中に細石刃石核が出土するなど、旧石器時代までその足跡がたどれる。

縄文時代は取木遺跡(24)で前期の焼石群と竪穴式住居、平地住居が各1棟出土した。弥生時代前期はイキス遺跡(23)の土壙墓群が知られる。弥生時代中期は西前遺跡A地区(44)で竪穴式住居が、北条町米里の北に突き出た丘陵先端で銅鐸(46)が出土した。弥生時代後期は遺跡が増加する。墳墓は柴栗古墳群中の四隅突出型墳丘墓の可能性のある柴栗墳丘墓(36)、手焙形土器の出土した三度舞墳丘墓(37)がある。集落はクズマ1次(15)、桜木遺跡(20)、上神宮ノ前遺跡(21)、夏谷遺跡(54)がある。

古墳時代は集落として、クズマ1次(15)、桜木遺跡(20)、西山遺跡(18)、猫山遺跡(34)、西前遺跡(44)(45)、夏谷遺跡(54)などがある。前期の古墳は、仿製の三角縁神獸鏡、変形六獸鏡、碧玉製鉄形石、滑石製琴柱形石製品が出土した上神大将塚古墳(35)(円墳・直径30m)大谷大将塚古墳(39)(前方後円墳・全長50m)、カスガイ状の周溝をもつ方墳群の猫山遺跡(34)、中峰古墳群(56)がある。古墳時代後期には上神古墳群(9)をはじめ多くの古墳群が形成される。調査例として、西山遺跡の古墳群(18)、クズマ1次調査の古墳群(15)などがある。終末期の古墳は、取木遺跡(24)、一反半田遺跡(25)、両長谷遺跡(29)で調査されている。

祭祀遺跡としては同じ上神地内にイガミ松遺跡(17)、谷畑遺跡(19)がある。イガミ松遺跡はクズマ3次の南東約150mの丘陵尾根上に位置する。採集資料のため詳細は不明であるが、土製の人形、馬形、竈形、有溝円板、器材形、手捏土器が出土した。谷畑遺跡は北東400mの谷奥にある。祭祀遺物は2箇所集中し、器種構成と時期に違いがある。どちらも手捏土器が出土しているが、東側集中部分は土製人形と動物形を中心に有溝円板、土

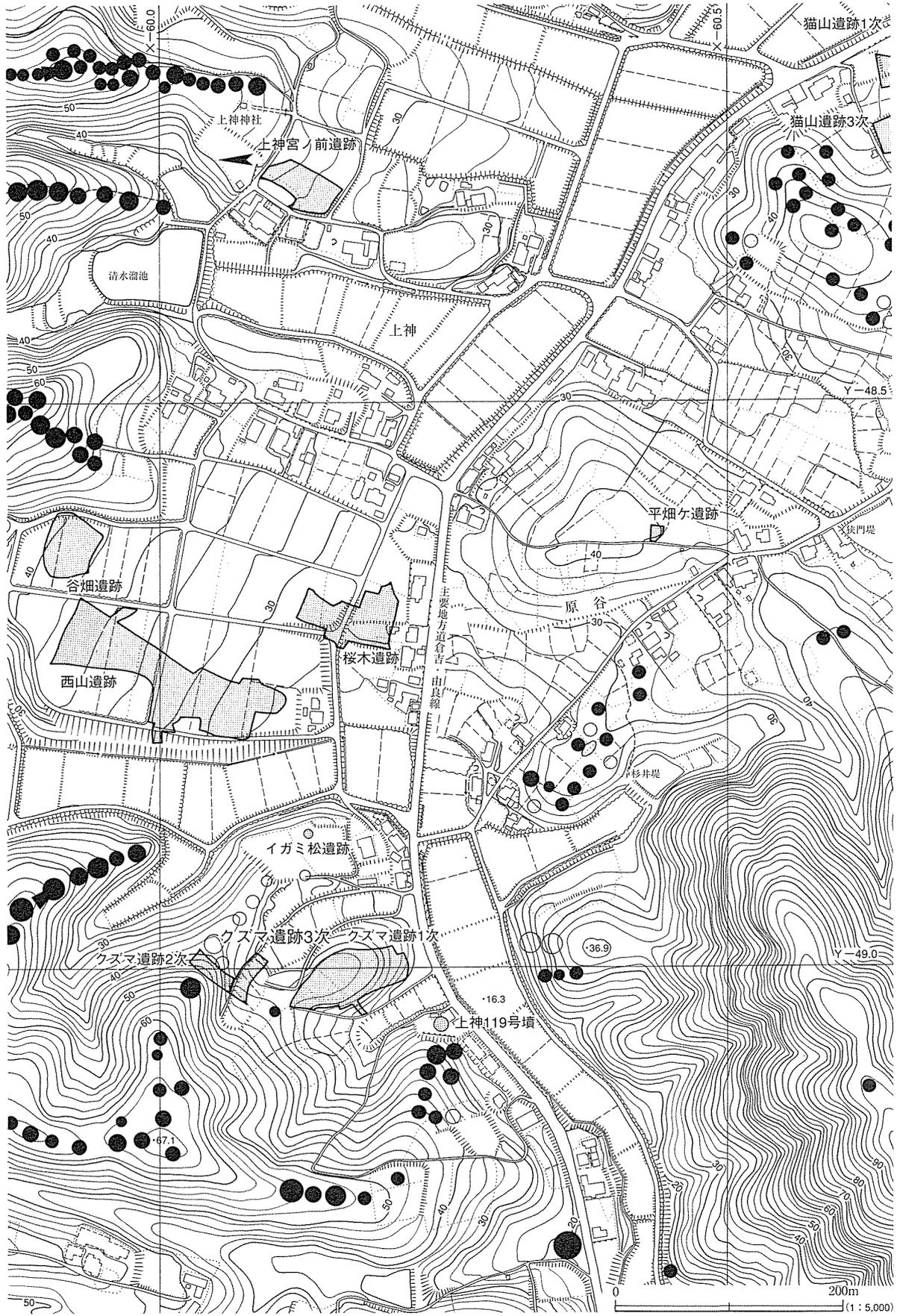


第1図 周辺の地形と遺跡分布図

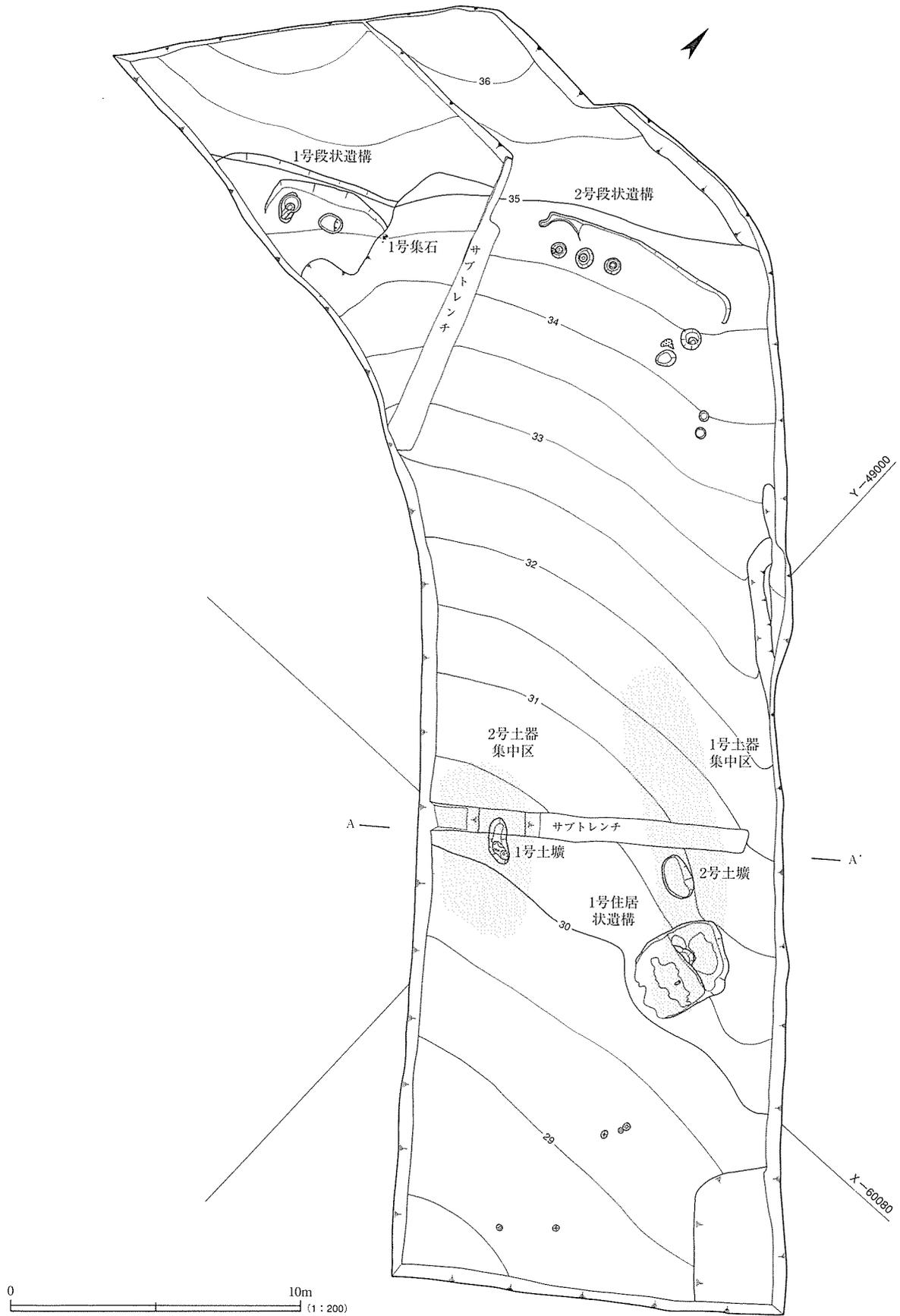
(1 : 25,000)

- |           |            |               |            |            |
|-----------|------------|---------------|------------|------------|
| 1 原古墳     | 13 上神51号墳  | 25 一反半田遺跡     | 37 三度舞墳丘墓  | 49 長谷遺跡    |
| 2 曲古墳群    | 14 上神119号墳 | 26 コザンコウ遺跡A地区 | 38 イザ原遺跡   | 50 大平ラ遺跡   |
| 3 北尾古墳群   | 15 クズマ遺跡1次 | 27 コザンコウ遺跡B地区 | 39 大谷大將塚古墳 | 51 屋喜山古墳群  |
| 4 島古墳群    | 16 クズマ遺跡2次 | 28 道祖神峰遺跡     | 40 小林古墳群   | 52 屋喜山9号墳  |
| 5 島崩山遺跡   | 17 イガミ松遺跡  | 29 両長谷遺跡      | 41 イザ原古墳群  | 53 西ノ谷遺跡   |
| 6 島遺跡     | 18 西山遺跡    | 30 古墳群        | 42 中尾遺跡    | 54 夏谷遺跡    |
| 7 曲226号墳  | 19 谷畑遺跡    | 31 四王寺跡       | 43 トドロケ遺跡  | 55 和田城跡    |
| 8 穂波古墳群   | 20 桜木遺跡    | 32 大谷城跡       | 44 西前遺跡A地区 | 56 中峰古墳群   |
| 9 上神古墳群   | 21 上神宮ノ前遺跡 | 33 東挾間古墳      | 45 西前遺跡B地区 | 57 沢ベリ遺跡1次 |
| 10 上神44号墳 | 22 伯尾山寮跡   | 34 猫山遺跡       | 46 米里銅鐸出土地 | 58 沢ベリ遺跡2次 |
| 11 上神45号墳 | 23 イキス遺跡   | 35 上神大將塚古墳    | 47 若林遺跡    | 59 平ル林遺跡   |
| 12 上神48号墳 | 24 取木遺跡    | 36 柴栗古墳群      | 48 若林2号墳   |            |

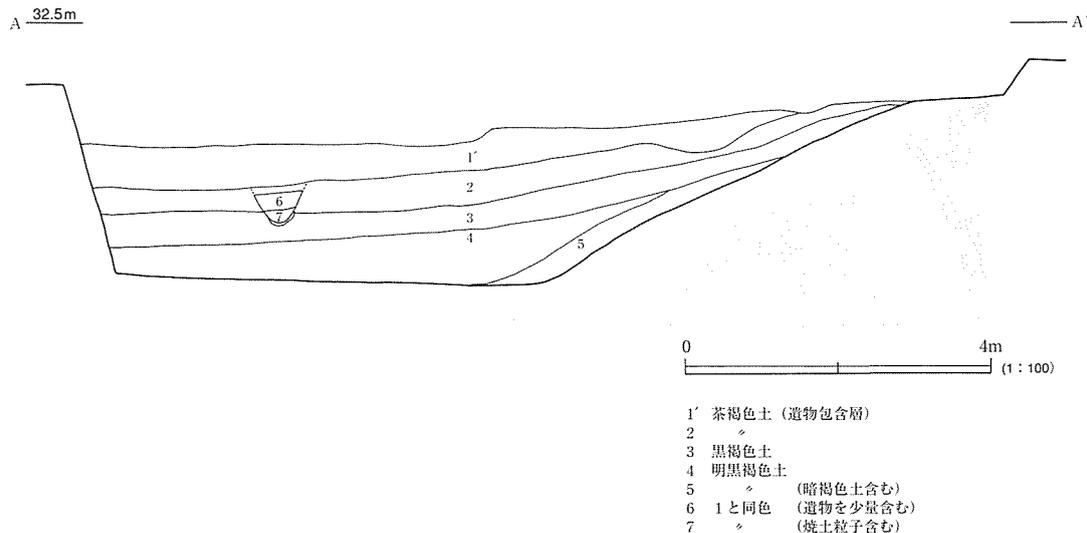
製鉤形状が6世紀末の土器と共に出土した。集中部分の中心は何もない部分があり、木の根元に集めた状態と考えられている。西側集中部分は、土製支脚、竈と共に土製鏡形や丸玉、メノウ製勾玉が7世紀前半の須恵器と共に



第2図 クズマ遺跡第3次発掘調査区位置図



第3図 クズマ遺跡第3次発掘調査区遺構全体図



第4図 サプトレンチ断面図

に出土した。この遺跡はすぐ西側尾根にある西山遺跡との関連が指摘されている。これら祭祀遺物は一括して国の重要文化財に指定されている。

奈良時代には、伯耆国庁、伯耆国分寺、法華寺畑遺跡（国分尼寺）、不入岡遺跡が四王寺南側の通称久米ヶ原丘陵上に近接して設けられ伯耆国の中心地として栄える。平安時代には四王寺山に四天王像を安置し、修法を行った四王寺(31)が建立される。

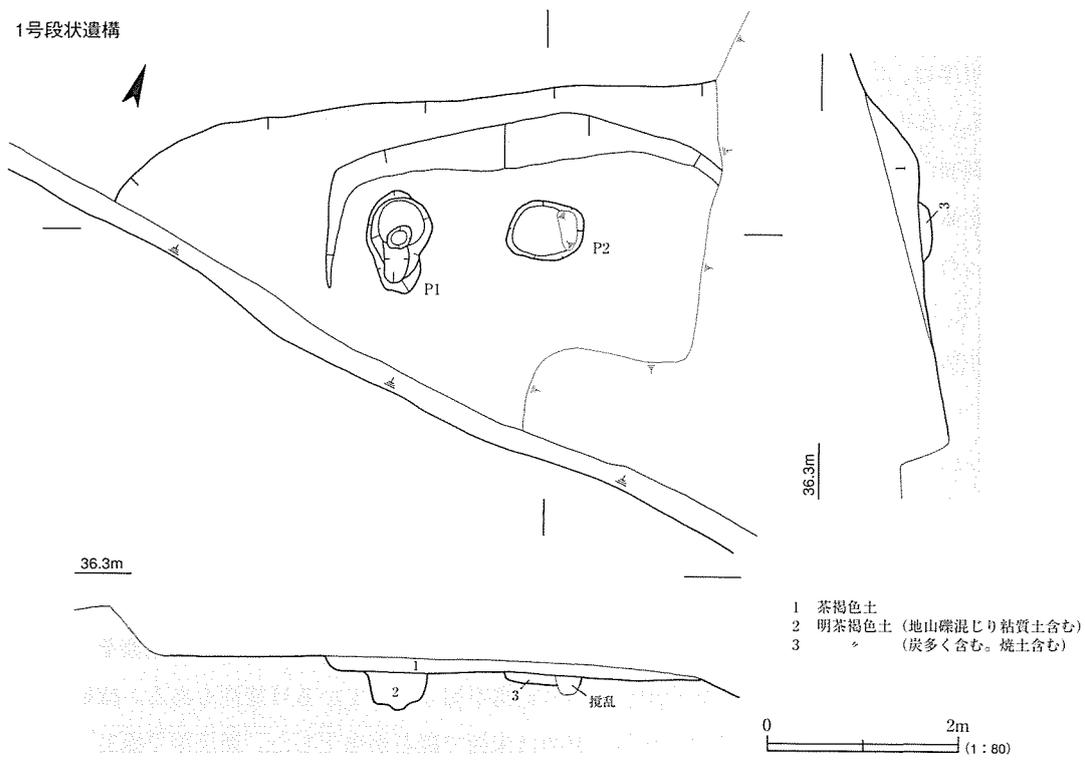
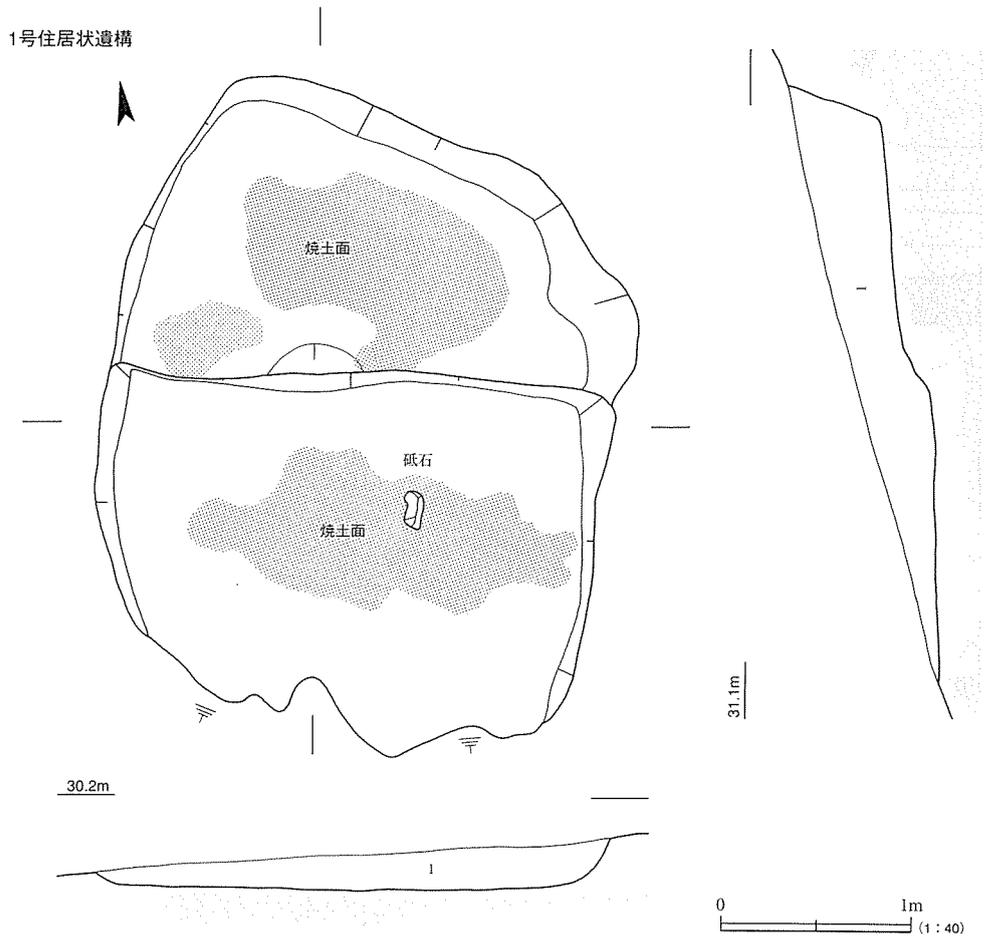
### Ⅲ 調査の概要

調査地の基本層序は、①茶褐色土（表土）、①'茶褐色土、②黒褐色土、③明黒褐色土、④明黒褐色土（暗褐色土含む）である。このうち遺物を包含する層は①と①'である。遺構の検出は適時行ったが、最終的に②と③の間で行った。調査の途中、包含層の深さを確認するため、サブトレンチを調査区中央と北西の2箇所掘り下げた。調査地の北側と東側については地山が高く遺物包含層が薄いため、ソフトローム土ないし礫混じり粘質土で遺構検出を行った。遺物包含の密度は高い状態であったが、特に意味のない包含状況と判断した場合はそのまま取り上げを行い、特に集中してまとまっている箇所について、写真、平面図などの記録を取った。

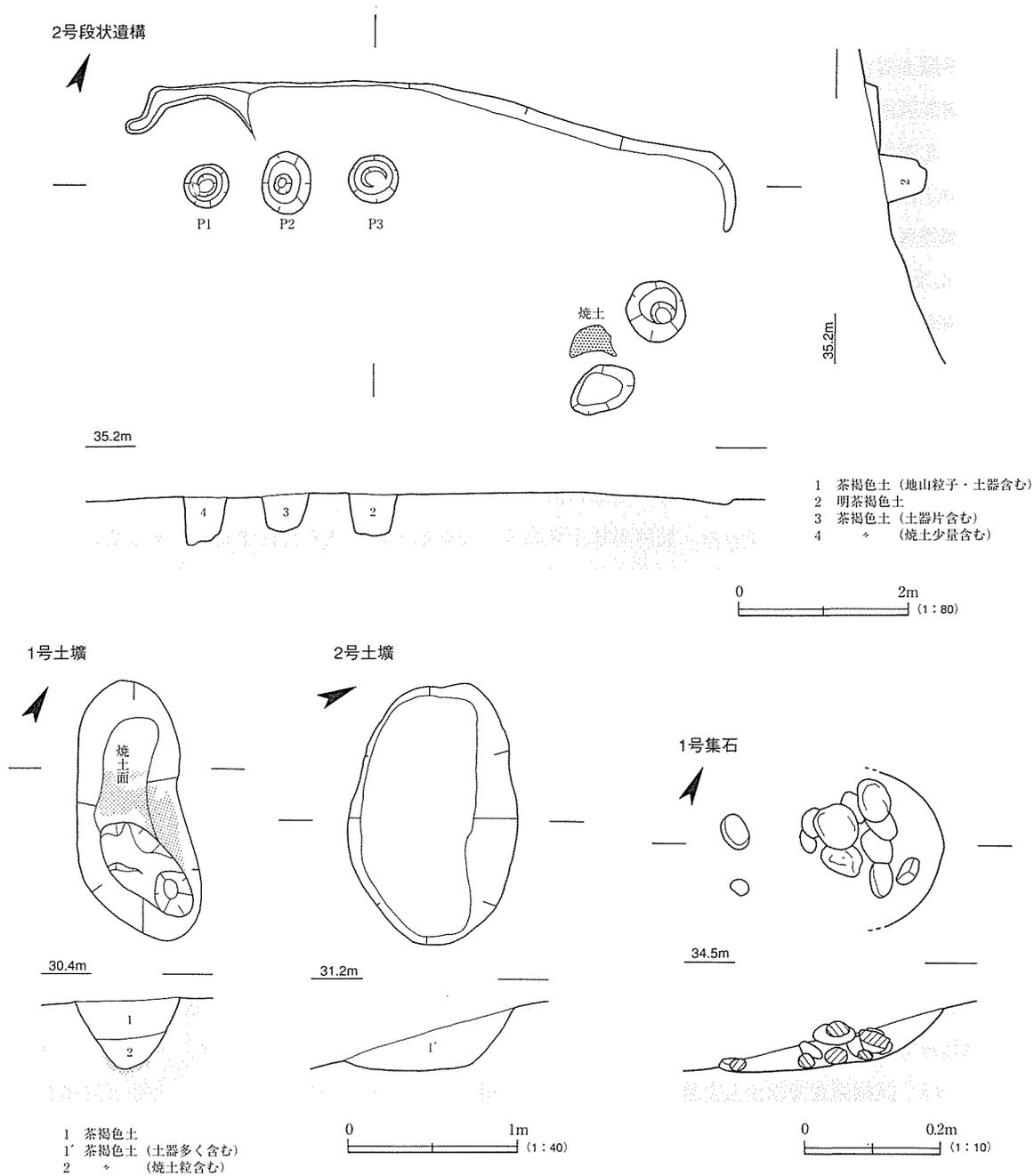
調査の結果、住居状遺構1、段状遺構2、土塋2、集石1、土器集中区2を確認した。

#### 1 遺構

1号住居状遺構 調査区西側の斜面部分の標高30～31m、1号土器集中区の下層に位置する。平面形は不整な四角形であるが、南の低い側については、地山を掘り込んでいないため壁の立ち上がりが確認できなかった。検出面規模は、残存長3.24m×2.8m、最大壁高約0.6m、遺存する床面積は6.7㎡である。床面中央には約0.2mの直線的な段差があり、それぞれが水平の床面をもつ。掘り下げ中の断面ベルトで段差付近の観察をした結果、切り合いは確認できなかった。ただし、その形状から2つの遺構が切りあっている可能性もある。床面は上段、下段の床面とも焼土面が広がり、周壁溝、柱穴はない。遺物は床面で砥石が出土した。埋土中で甗33、甗34をはじめ多くの遺物が出土したが、いずれも上層にある土器集中区遺物の流れ込みである。



第5図 1号住居状遺構、1号段状遺構 遺構図



第6図 2号段状遺構、1号・2号土壙、1号集石 遺構図

**1号段状遺構** 調査区北西側の斜面部分の標高34.5m～35mに位置する。斜面地形の山側を弓状に6.4m（残存長）カットしてその内側を、長さ4.1m・幅2.0mコの字に掘り下げて平坦面をつくる。平坦面でピットを2つ確認した。穴間の距離は心々で1.56mである。P1は検出面で瓢箪形、底面で円形となる。P2は隅丸長方形で深さ約0.1mと浅く底が平坦である。柱痕跡は断面観察したが、確認できなかった。ピットが東側に展開すると推定されるが、遺構面が地山まで達していないためわからない。遺物はP1、P2から須恵器小片、土師器片、奈良期甕片が、P2から炭片が出土した。また、遺構掘り下げ中に須恵器挿鉢23が出土した。

**2号段状遺構** 調査区北側の斜面部分の標高34.5m～35m、1号段状遺構に並列し、約5m離れて位置する。斜面地形の山側をカスガイ状に幅約7.3mカットして平坦面をつくる。ただし、西端約1.6mについては溝状になる。平坦面の西半分でピットを3つ確認した。ピットは円形もしくは楕円形で直径0.6m～0.7m、深さ0.5m～0.8m

である。東側半分も精査してピットの確認に努めたが確認できなかった。遺物は各ピット埋土中で土師器片、遺構埋土中で手捏土器15、ミニチュア高坏29が出土した。

1号土壙 調査区南側の標高30mに位置する。平面形はいびつな楕円で長さ1.56m・幅0.68m・深さ0.82mである。ただし、北西側については、サブトレンチによって底面近くまで掘り下げてしまったため、長さについては正確ではない。土壙の底面は火を受けて土が厚さのある焼土面となっている。遺物は埋土中から出土しなかった。

2号土壙 調査区東側1号住居状遺構の西1mの標高31mに位置する。平面形はいびつな楕円で長さ1.52m・幅1.0m・深さ0.38mである。遺物は埋土中から弥生土器の壺32他、甕、器台の破片が出土した。

1号集石 調査区北西側斜面の1号段状遺構すぐ東の標高34.5mに位置する。山側を半円形に掘り窪めているが谷側は掘り込まない。その中に3cm～5cm大の川原石を10個余り集めている。遺物は石以外出土しなかった。

1号土器集中区 調査区やや東寄り、標高30m～32m、長さ約19m・幅約4mの長い楕円形に土器が集中して出土した。掘り込みは未確認である。土器はいずれも土師器で、須恵器は含まれない。器種は甕、壺、高坏、小型丸底壺などで甕が特に多い。出土状況は谷の地形に沿って北西から南東へ低くなる。破片が多いがサブトレンチの北端付近では完形の遺物が多かった。紡錘車状土製品6、器材形5、小型の台付壺22が出土した。

2号土器集中区 調査区南寄り、谷のほぼ中央標高29.5m～30.5m付近で長径約6m・短径約3mの楕円形に出土した。集中の程度は1号土器集中区より低い。出土状況は、破片が多く、完形に復元できるものはなかった。スタンプ文土器37、竹管文土器42、47が出土した。

## 2 遺物

今回の調査では土師器を中心に、須恵器、土製品、竈、土製支脚、フィゴの羽口片、弥生土器などコンテナ約75箱分の土器類と動物形、手捏土器、器材形土器、ミニチュア高坏などの祭祀遺物、鉄鏃1、鉄滓約2.73kg、石錘1、作業台2、磨石8、敲石6、砥石13などが出土した。土器類のほとんどが日常土器であった。ここでは祭祀遺物を中心に述べる。なお、試掘・確認調査時に出土した祭祀遺物についてもここで合わせて取り上げる。3次調査全体で出土した土製の祭祀遺物の種類と数は、動物形4（うち馬形1）手捏土器27、器材形土器4、ミニチュア高坏5、不明品6である。祭祀遺物の出土位置は、特にどこに集中するという特徴はなく、ほとんどが日常土器に混じって遺物包含層中での出土であった。

動物形(1～4) 試掘調査で出土した馬形1は具象的な表現をしており、鞍の表現はない。四肢と尻尾が欠損。2は胴部片でたてがみと尻尾を表現する。頭部と四肢が欠損。3は上半身片でたてがみと耳を表現する。4は下半身で、四肢と尻尾が欠損する。

紡錘車状土製品(6) コマの形状をするもので、中心部に焼成前の穿孔をするが貫通はしていない。クズマ2次調査で良く似た穿孔の貫通した紡錘車が1点出土している。

器材形(5、7、24、35) 5は壙の底部につまみ状の突起をつけたもの。7は壙の体部側面から突起が出るもの。匙状になるか?、24は蓋、35は高坏か。

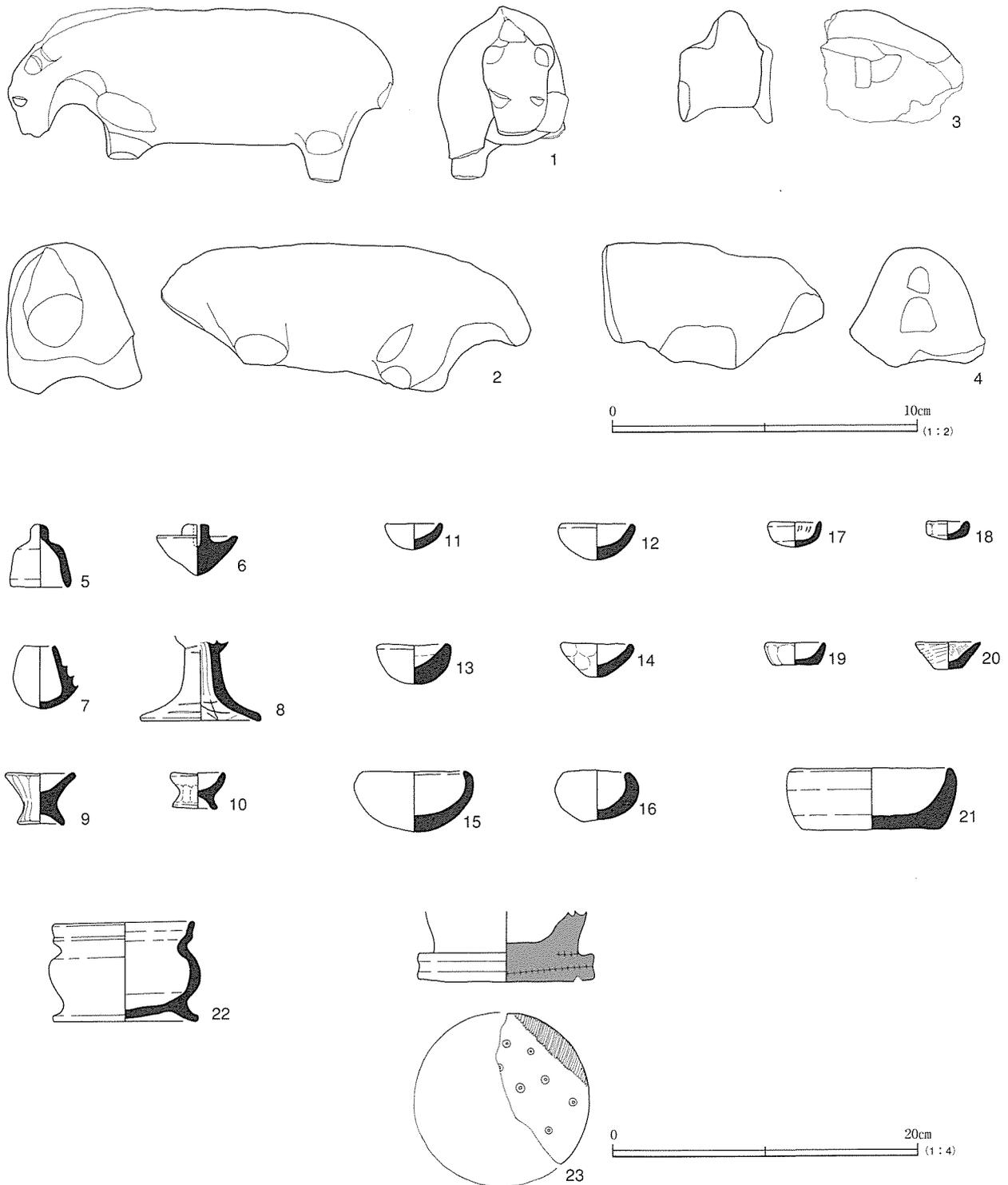
ミニチュア高坏(8、27～31) 脚部の直径がいずれも約8cmの小型脚部片と試掘で出土した坏部片28である。

手捏土器(9、10、11～16、17～21、25、26) 形態のわかるものはいずれも壙である。丸底は11～16、試掘で出土した26の7点、平底は17～21の5点と小片2点の計7点である。17、18はやや丸底気味。9、10、25の3点は高台を造り出す。調整は基本的に指オサエとナデによる。平底の20は、外面タタキ、内面ハケメ調整する。大型の21を除き口径3～5cm、器高2cm～4cm前後である。

スタンプ文土器(36、37、38) 3点出土した。36は壺形土器で直径約9cmの直立した頸部と大きく開く口縁部

片である。頸部は鳥の頭部様に先のとがったハケメ状の文様を3段に施し、下段については文様を反転させる。上1段と2段目の間の一部に横一列に竹管文がある。頸部と口縁部境は断面三角形の凸帯を2条巡らし、それぞれの先端に刻み、下側に竹管文を巡らす。38は36と同一個体とみられる小片。37は同心円をスタンプしたもので2号土器集中区出土。

竹管文土器(39~50) 12点出土した。半円状のものを組み合わせてS字状とした同一個体とみられるもの47、48と円形のものがある。円形の竹管文は大きいもので約2cm、小さいもので数mmと何種類か大きさがある。42、47



第7図 出土遺物実測図

の2点が2号土器集中区で出土した。

その他土器(22、23、32~35) 甗33は底部に4個の焼成前穿孔がある。35は小型の器台か。須恵器播鉢23の底部片は、底部裏面に刺突文、焼成前の編物痕跡ある。

## IV まとめ

今回の調査によって明らかとなったことを整理し、まとめとしたい。

各遺構の時期 1号住居状遺構は埋土中から多くの土師器が出土した。この土器は1号土器集中区のものである。これらは土井編年<sup>註1)</sup>のイザ原段階に相当するため、1号住居状遺構は5世紀代の遺構と推定される。1号段状遺構は埋土中で宝珠つまみ、環状つまみの須恵器蓋片が出土したため陰田<sup>註2)</sup>の段階に相当し7世紀後半ころと推定される。2号段状遺構は土井編年イザ原段階の土器が埋土中から出土したため、5世紀代の遺構と推定される。2号土壙は土井編年東高江2号貯蔵穴段階の土器が出土した。弥生時代終末期ころの遺構と推定される。1号土器集中区は土井編年イザ原段階に相当するもので5世紀後半ころの短期間に1箇所でも多くの土器を廃棄したものとみられる。このうち紡錘車状土製品は、2次調査1号墳下層で類似品が出土している。2次調査のものは穴が貫通し、3次調査のものは貫通しないがそれ以外は非常に似る。2号土器集中区は主に4世紀から5世紀の幅広い土器群である。

祭祀遺物について 今回の調査で祭祀遺物は動物形(馬形)、手捏土器、紡錘車状土製品、器材形、ミニチュア高坏が出土した。また祭祀遺物の可能性があるものに竈片、土製支脚片が出土した。全体の出土遺物は弥生時代後期から8世紀と幅広く、祭祀遺物については1号土器集中区の5世紀後半ころと、7世紀後半から8世紀前半の2時期に分かれる。いずれもクズマ2次調査の遺物時期と一致する。遺物の組成は、動物形(馬形)と手捏土器を中心にした限定的なもので人形の出土がない。これはクズマ<sup>註3)</sup>1次・2次調査に似ており、馬形に鞍の表現がない点で2次調査の組成により近い。出土の状況は1号土器集中区が、土器を廃棄したとみられる日常土器と共に紡錘車状土製品6、器材形5が出土した。しかし、他の祭祀遺物は出土にまとまりが無い。出土遺物の時期、祭祀遺物組成の一致、調査場所の隣接から2次調査地と3次調査地は同一の集団が祭祀遺物の廃棄を行った可能性が想定される。

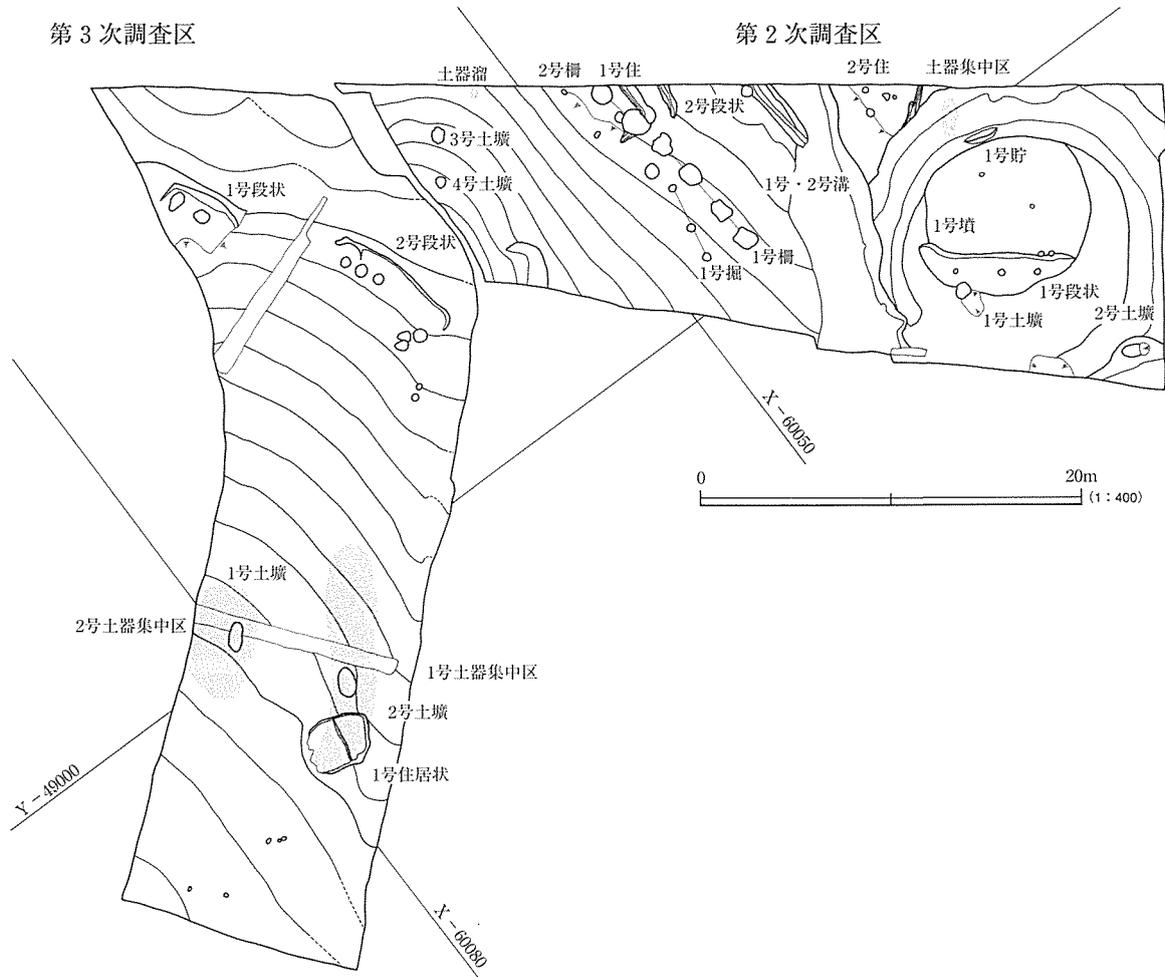
蜘蛛ヶ家山南麓の丘陵末端部近くに祭祀遺跡、祭祀遺物が集中することが今回の調査でいっそう明確になった。しかし、祭祀を実修した場と状況や廃棄の規則性については不明で、今後の検討課題である。

### 註

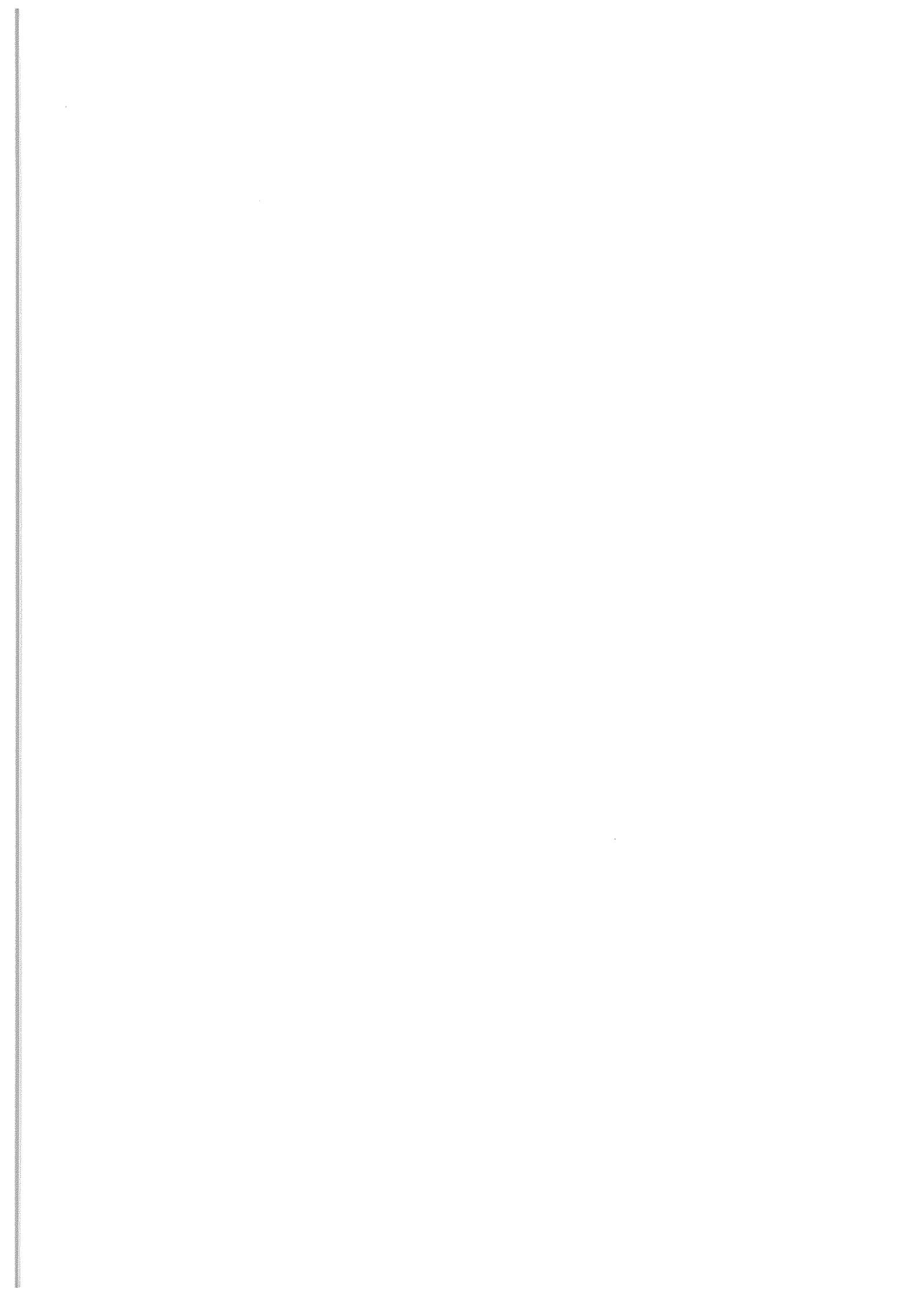
- 1 土井珠美 「鳥取県の状況」 『弥生後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986
- 2 萩本 勝 他 「陰田」 米子市教育委員会 1984
- 3 眞田廣幸 「鳥取県クズマ遺跡」 『日本考古学年報39』 1986年度版 日本考古学協会 1988
- 4 岡平拓也 「クズマ遺跡第2次発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1000

### 参考文献

- 土井珠美 「谷畑遺跡」 『倉吉市内遺跡群分布調査報告書Ⅱ』 倉吉市教育委員会 1985  
根鈴輝雄 「第二項 郷土の祭祀遺跡」 (『新編 倉吉市史』 第一巻古代編) 1996



第8図 クズマ遺跡第2次・第3次発掘調査区遺構模式図





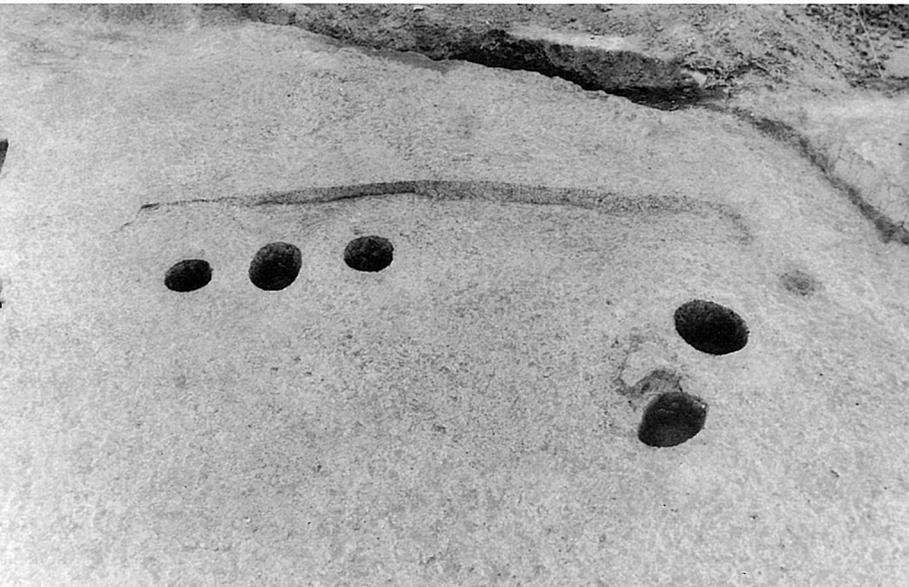
△調査前全景（南から）  
▽調査後全景（南から）



1号住居状遺構（南から）

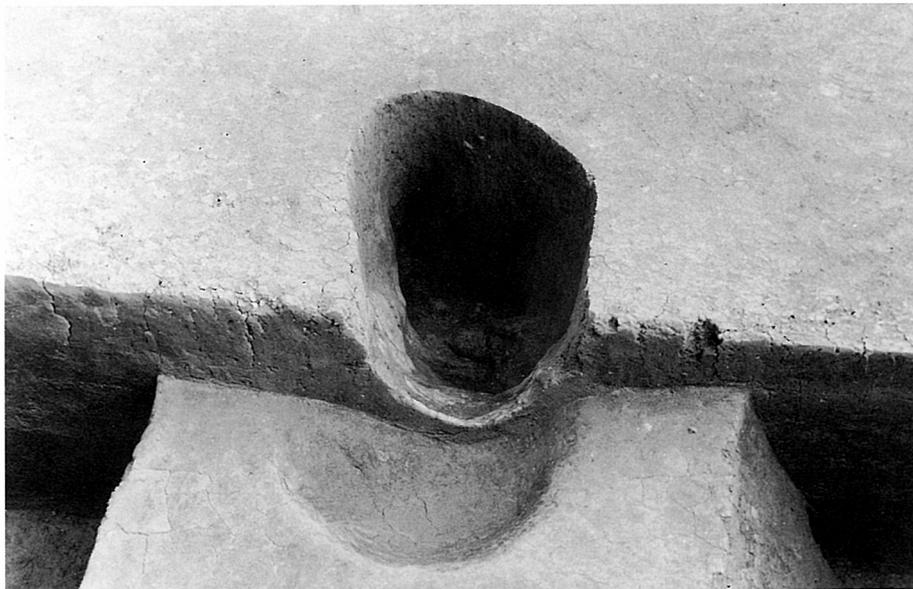


1号段状遺構（南から）



2号段状遺構（南から）

1号土壙 (南東から)



2号土壙 (南西から)



1号集石 (南から)





1号土器集中区（南から）



1号土器集中区南端（南から）



紡錘車状土製品出土状況  
（南から）

2号土器集中区 (東から)

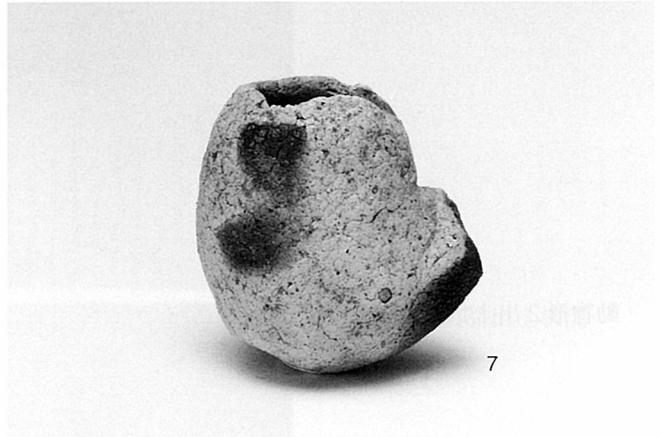
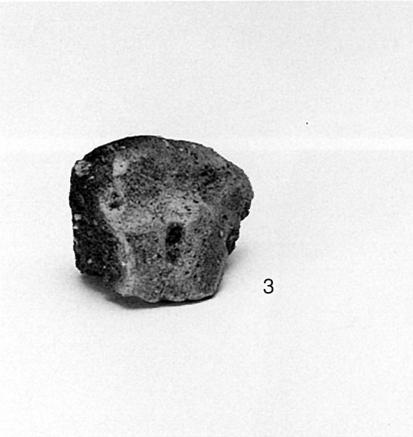
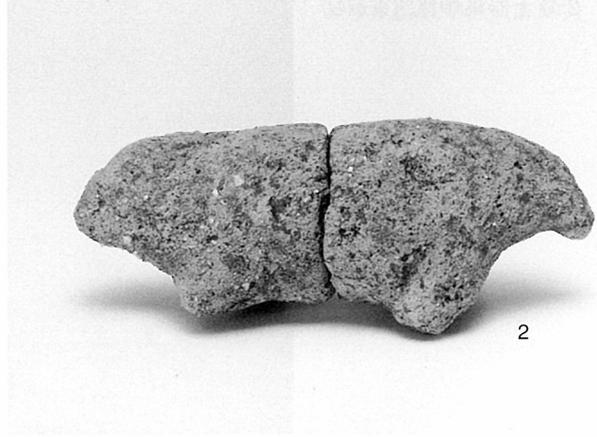


2号土器集中区北端 (東から)



動物形2出土状況 (北東から)







10



9



19



18



20



21



15



13



12



14



11



26



16



27



28



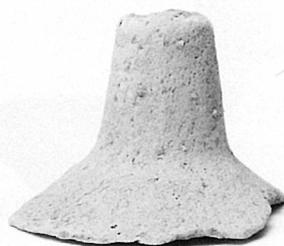
29



8



30



31



32



33



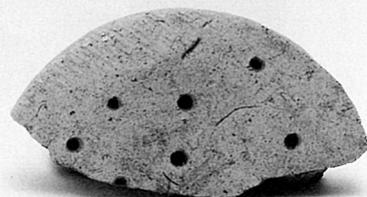
34



35



23



23



36



37



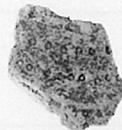
38



39



40



41



42



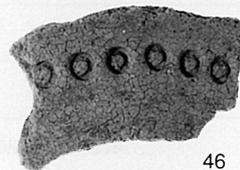
43



44



45



46



47



48



49



50

報告書抄録

書名	クズマ遺跡第3次発掘調査報告書						
副書名	—						
巻次	—						
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第119集						
編著者名	加藤 誠司						
編集機関	倉吉市教育委員会						
所在地	〒682-8611 鳥取県倉吉市葵町722番地 TEL 0858-22-4419						
発行年月日	西暦2003年3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村：遺跡記号					
クズマ遺跡3次調査	倉吉市上神字クズマ	31203：4 DKK	35° 27' 27"	133° 47' 36"	20020612～20020919	500㎡	個人の農地造成
所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構		主な遺物		特記事項	
クズマ遺跡3次調査	祭祀 集落	弥生：土壙	1基	土師器、須恵器、弥生土器、	祭祀遺物が斜面や浅い谷の部分で多くの日常土器に混じって出土した。		
		古墳：住居状遺構	1基	スタンプ土器、手捏土器、動			
		段状遺構	1基	物形、ファイゴの羽口、作業台、			
		土器集中区	2基	敲石、砥石、磨石、鉄鏝、鉄			
		奈良：段状遺構	1基	滓			

---

## クズマ遺跡第3次調査報告書

平成15年3月20日 印刷

平成15年3月20日 発行

編集  
発行 倉吉市教育委員会

印刷  
製本 勝美印刷株式会社

---